

草や青刈作物はなるべく雨露に当たらず速かに干し上げたものが品質がよい。青刈大豆のようなものはハサ掛け蔭干すると栄養分の多い葉の脱落を少なくし、青味を帯びた良質のものがえられる。乾燥調製中天候悪く雨露に当たったとき、また晚秋水分の多い甜菜類葉を乾燥する方法として、一度大木堆に積み酸酵熱が出てから、晴天の日を見計り木堆を拡げて速かに干し上げると栄養分は劣るが貯蔵に堪える褐色乾草ができる。

デントコーンサイレージの品質のよいもの

を造るには、デントコーンが黄熟期に達するのを待つて刈取り長さ二糸くらいにカッターで細断してサイロ内に吹込む。サイロ内には数人入り吹込まれた原料をフオーグで一面に拡げ均したり踏付たりする。この際、カッターからサイロ内に吹込む円筒の先に内径一尺以上の大きな継足し円筒をつり下げ、円筒の先にロープをつけ、人がロープの端を握つてサイロ内を移動して歩くと、原料をサイロ内に散くことができる。手間が除ける。原料の散布と同時に、よく踏付を行い空気をできるだけ除いて固く詰めることが大切である。サイロの周縁や取出口の蓋の部分などは、固く詰め悪い空気が残り黴が生え、腐りやすいから、特に入念に踏付を行なう。また蓋の周囲には、空氣の侵入を防ぐため、外部より粘土を塗る。ついで原料の腐敗を少なくし歩留を良くするには、上層の覆蓋が大切である。これには、茎を數き土を一五糸以上あげるとか燕麦を播くとか、野草を切込むなどが行われる。

青刈大豆のサイレージとしての刈取適期

は莢に少々実が入り下葉が数枚枯れはじめたころで、これをデントコーン三割くらいに混ぜて詰めると、栄養価値を著しく改善することができる。

向日葵の刈取適期は、大体各株とともに発育の早い花に実がかなり入り、下葉が数枚枯れ始めたころで、これをデントコーンに三割くらい混ぜて詰めたものは、品質や牛の嗜好の点でデントコーンサイレージに劣らないものができるのであって、牛乳の脂肪率はむしろ高まる。

尿素添加サイレージを造るには、予め秤

つておいた尿素をサイロ内に持込み、一方サイロの壁にサイロの容量を示す印を書いて置き、デントコーンに大体尿素が〇・五〇・六%添加されるよう万遍なく散きながら詰込む。その他はデントコーンサイレージの造り方と全く同様である。蛋白質は生で一%乾物で四%くらい高まる。ただしこの際青刈大豆混合デントコーンサイレージに、尿素を添加すると青刈大豆の中に含まれている尿素分解酵素ウレアーゼによ

るから注意を要する。

根菜類は普通根菜貯蔵庫や圃場に堆積し

て与えるとよいが、馬に対しては煮るか、蒸して与える必要がある。

士をかけて貯えられるが、馬鈴薯の特別な貯蔵法として、馬鈴薯を細断して米糠を二七日経つと、サイレージ内温度は四五度で五〇度に昇るが、約四〇日経つと温度は次第に下がり室温くらいとなる。このころになると、纖維は軟化して適當の酸味と芳香を有するサイレージができ上がる。

馬鈴薯は牛に対しては生のまま細断して

磨碎して米糠を添加しながらサイロに詰め込みサイレージとし貯蔵する方法がある。馬鈴薯は牛に対しては生のまま細断して事項について述べたに過ぎないが、来るべき冬のためよりよき準備をお願いします。



樹齢4年生の大久保
(北海道仁木・安崎氏)

寒地における桃の栽培

赤 羽 雄

昭和の始め頃、北海道においても桃がかなり散在していたのを記憶している。この桃は、「桃太郎」の絵に見る、先端が尖つて縫合線の深い桃が主であつた。つまり天津桃といつて、液汁が多く、風味のない桃であつたが、この桃もいつの間にか、殆ど姿を消してしまつた。おそらく味が悪

いばかりでなく、スカシバや縮葉病などの被害によつたものであろう。

最近道南の都市近辺に桃栽培の氣運が高まり、すでに水蜜桃を栽培している園が見られるだけに、今後に期待をかけている人があると考えられる。しかし北海道の桃栽培となると問題点が多く、決して府県のみ

の考え方ではない。そこで今度は北海道における問題だけを拾い上げ、説明していく事にする。

一 発 芽

桃は活動開始初期の気温に対しても敏感で、北海道では春先の気温の低い時は、開花期が著しく遅れる。年によつては、同一場所でも、十日以上の遅延が見られる。從つて開花期がおくれれば、晩霜の心配はないとしても、それだけ収穫期がおくる事になる。開花から収穫迄府県では大体一〇五日前後（中生種）であるが、北海道では一一〇～一二〇日位かかる。従つて収穫期が九月上旬になる。九月以降は、おくれる程品質が劣る傾向があるから、出来れば八月一杯で収穫したいものである。それには、開花期を早める事が大切で、場所の選択には特に気をつける必要がある。つまり南面で風当りの少い、暖かい所で、時には風防のため、囲いも考えねばならない。

なお北海道の特徴としては、葉芽の活動が、花芽よりも早い事、早中晩の品種の差別なく開花期が同一であるということである。葉芽の早く崩芽する事は、縮葉病が多くなる一原因とも考えられる。

二 主な病害虫

(1) 縮葉病：この病気は、関東以南の暖地には少いが、本道では、年によつては多発して全滅に近い被害を与える事がある。特に春の低温多湿の年には警戒せねばならない。最近では、昭和三十年、三十二年に

発生が多かつた。病徵は葉が赤褐色にふくられて次第に病斑が大きくなり、初夏には白色を帯びて落葉する。

防除法は、確実な薬剤撒布を励行する事で、発芽前のクロン加用濃厚石灰硫黃合剤で完全に近いだけの効果があげられる。

(2) 細菌性芽孔病：この病気は、それほど大きな病気ではないが、品種によつてはかなり発生するし、風当たりの強い園ほど多く発する。病徵は、初め葉に円形の小さな孔があき、次第に孔が続いて大きくなつて落葉する。防除法としては、有機殺菌剤を数度撒布する事が必要である。ボルドウ液は絶対に使つてはいけない。

(3) ハダニ：盛夏の高温乾燥時に、ハダニの発生が著しいから、硫酸ニコチン、ニッカリン等を撒布すれば、薬害はなく、果実に臭氣をつけないで完全に防除出来る。

(4) スカシバ：本道では著しい多発を見る。主幹や主枝の又部などに幼虫が喰入していく、穴からは虫糞や樹脂を出しているのが見られる。つまりこれがその被害で樹勢を弱めてついには枯死させる恐い害虫である。

防除法は「ホワイトウォッシュ」といつて、石灰乳とホリドールを混用したものを、年二回、春と初夏に主幹や主枝に塗布すれば、完全に近い程の効果があるばかりでなく、夏期の日焼防止にもなる。

以上の他に、炭疽病、心折、カイガラムシ、エカキムシ、チョッキリゾウムシ等の病害があつて、府県では大被害を与えているが、本道では、非常に少ないようである。

三 品 種

府県では早生桃は六月上旬から収穫し、晚生種は、八月上旬迄を限度としている。ようだが、品質の最も優良なものは、七月下旬に収穫の出来る中生種である。北海道では早生種であつても、八月上旬にな道では早生種であつても、八月上旬にな

から、中晚生種という事になるが、晚生種では九月中旬以降の収穫となる。従つて夜の気温低下と共に、品質が劣化するばかりでなく、長く樹に負担をかけているので、芽や枝の耐寒性を弱める結果ともなる。本道では遅くとも、九月上旬には収穫が完了できる中生品種を一応狙い、これに早生種のよい品種を加えて行くのがよいと考える。

筆者は、本道においては、数種類のものしか栽培した経験がないので、正確にはいえないが、一応よいと思われる品種をあげれば、橋早生、倉方早生、昭玉、宿力原早生、白鳳、大久保等である。しかし、さがせばこの他にも適応する品種があると考へる。

四 凍 害

従来、桃は低温には弱い果樹とされて来た。なるほど、りんごや小果樹にくらべれば弱いのが事実である。しかし凍害は、環境要素のはかに、樹自体の充実度が大きく関係するから、本道のよつた寒冷地で、無事に冬を越させるためには、耐寒性品種を

合理的に行つて、樹体を健全に保持する事が大切である。普通の管理を実施していれば、桃の芽や枝は、十一月～十二月の圃場で零下C十五度迄は持ちこたえられる。なお、桃の芽や枝は、枝の頂部、中部、基部等その在る場所と冬季間中の時期によつて、著しく耐寒性が異なるものである。

桃は不定芽が殆んど発生しないから、新梢や芽が枯死すれば、結実は勿論の事、枝の伸長は不可能になるから、芽や新梢の凍害については、特に関心をもたねばならない。従つて北海道では窒素肥料の過剰施肥や、遅効性などについては、一層注意せねばならない。若木の中は、藁等で枝を保護する事も一方法であるが、樹が大きくなれば困難な事であるから、樹自体を、栄養上から丈夫にするより途はない。併し筆者の観察では、栽植後の年数とともに、次第に環境になれて、耐寒性が強くなつていくようと思われる。

以上の諸問題から見て、北海道桃の栽培は、必ずしも不可能ではない。北海道は気象的な制約を受ける事が多いので、経済栽培は北海道南部の一部地帯となろう。自家用果樹として楽しむ程度なら、後志、石狩方面にも出来ない事はない。

桃栽培は、果樹栽培の中に副業的の意味で一部とり入れる事は面白いが、大面積で始めた時、一攫千金を夢見るような野心をもつことは、北海道の場合、厳に慎まねばならない。